『天から与えられたもの』ヨハネ3:22-30

3:22 こののち、イエスは弟子たちとユダヤの地に行き、彼らと一緒にそこに滞在して、バプテスマを授けておられた。
3:23 ヨハネもサリムに近いアイノンで、バプテスマを授けていた。そこには水がたくさんあったからである。人々がぞくぞくとやってきてバプテスマを受けていた。
3:24 そのとき、ヨハネはまだ獄に入れられてはいなかった。
3:25 ところが、ヨハネの弟子たちとひとりのユダヤ人との間に、きよめのことで争論が起った。
3:26 そこで彼らはヨハネのところにきて言った、「先生、ごらん下さい。ヨルダンの向こうであなたと一緒にいたことがあり、そして、あなたがあかしをしておられたあのかたが、バプテスマを授けており、皆の者が、そのかたのところへ出かけています」。
3:27 ヨハネは答えて言った、「人は天から与えられなければ、何ものも受けることはできない。
3:28 『わたしはキリストではなく、そのかたよりも先につかわされた者である』と言ったことをあかししてくれるのは、あなたがた自身である。
3:29 花嫁をもつ者は花婿である。花婿の友人は立って彼の声を聞き、その声を聞いて大いに喜ぶ。こうして、この喜びはわたしに満ち足りている。
3:30 彼は必ず栄え、わたしは衰える。

●序論
2016年に天に召された渡辺和子さんの「ふがいない自分と生きる」という本の冒頭
　-ひとつひとつのことを　本当にていねいに両手でいただいて、
　-たとえそれが病気であっても、災難であっても、挫折であっても、または人からの裏切りであっても。
　-本当に悲しい、つきかえしたい。
　-そのひとつひとつを両手でいただく。
　-神さまは力に余る試練を、決してお与えになりません。
我々には理解できないような出来事にも、神さまの大きな摂理があるのだと説く。
聖書を通して、その中にご計画をお持ちの神さまの存在と言葉に耳を傾けることができます。そうしてわたしたちは、仕事や生活、人生の別の思いを抱くことができる。また、その人生への別のアプローチが見えてくる、そういう経験をするのです。
そこから「すべてをご存じの父なる神さま、どうか導いてください」という祈りが生まれるのです。

●本論
Ⅰ．使命
　3:26 そこで彼らはヨハネのところにきて言った、「先生、ごらん下さい。ヨルダンの向こうであなたと一緒にいたことがあり、そして、あなたがあかしをしておられたあのかたが、バプテスマを授けており、皆の者が、そのかたのところへ出かけています」。

今、バプテスマのヨハネのそばに、不満を抱えた人がいました。それはヨハネの弟子たちでした。
それに対してバプテスマのヨハネは応えます。
3:27 ヨハネは答えて言った、「人は天から与えられなければ、何ものも受けることはできない。
天から、つまり神さまからヨハネが受け取っていたもの、それは「使命」です。
1:23 彼(ヨハネ)は言った、「わたしは、預言者イザヤが言ったように、『主の道をまっすぐにせよと荒野で呼ばわる者の声』である」。
神さまは、バプテスマのヨハネには、イエスさまの前に道を備える人としての使命を与えられました。それはほかの人が代行することのできない人生です。
同様にわたしたちも、神さまから、それぞれの人生がゆだねられているのです。
実は、すべての造られた者の中で人だけが、「神さまのかたち」に造られています。
それは、人だけが、神の息(いのち、霊)を与えられたということで(創世記2:7)、「神と共に生き、神の愛、聖さ、そして使命の中に生きる存在とされている」のです。

わたしたちもまた、バプテスマのヨハネと同様に、神と共に生き、神の愛、聖さ、使命に生きる存在としての人生を与えていただいています。
それを見いだして生きるために、自分の狭い視野や知識から始めるのではなく、神さまの御言葉から神さまの思いに気づかせていただきたいのです。
そうして、ひとりひとりあなたにゆだねられている神と共に生き、神の愛、聖さ、使命に生きる存在としての人生を歩む者でありたいと願います。

Ⅱ．謙遜
3:28 『わたしはキリストではなく、そのかたよりも先につかわされた者である』と言ったことをあかししてくれるのは、あなたがた自身である。
確かにヨハネは人々に問われてはっきりと告白しています。
ヨハネ1:20 すなわち、彼は告白して否まず、「わたしはキリストではない」と告白した。
さらに、こういいました。
ヨハネ1:23 彼は言った、「わたしは、預言者イザヤが言ったように、『主の道をまっすぐにせよと荒野で呼ばわる者の声』である」。
そして、こうも告白しています。
ヨハネ1:27 （キリスト）がわたしのあとにおいでになる方であって、わたしはその人のくつのひもを解く値うちもない」。
ヨハネはそうして、イエスさまを見いだしたとき、はっきりと
1:29 その翌日、ヨハネはイエスが自分の方にこられるのを見て言った、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。
1:30 『わたしのあとに来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この人のことである。
彼は決して高ぶらず、自分が何者であるかを告白し、そして、イエスさまに道を譲ることのできる人とされていきました。

実に、聖書を読んでいく時、幾人もの謙遜な信仰者の歩みが記されています。
（新共同訳）　民数記12:3 モーセという人はこの地上のだれにもまさって謙遜であった。
つまり、神さまに祝福された人の特徴は、みな謙遜であったということです。
それに反して、神から災いを受けた人々の特徴は皆、「傲慢であった」ためでです。

バプテスマのヨハネは、弟子たちの不満や自分の欲望に心を向けるのではなく、ひたすら自分にこの使命を与え、語り掛けてくださる神さまに心を向けていたのです。
神さまの恵みの大きさのもとで謙虚にされていく。実は、それが祝福なのです。

Ⅲ．満足と喜び
イエスさまの方に人々がついていき、バプテスマのヨハネのもとには人が来なくなりました。そして、福音書の他の並行記事を見ると、その後彼は、ヘロデ王にとらえられ、牢に入れられ、また宴会の余興で首を切られて殺されていきました。
こういうお話だけを聞くと、彼の生涯は悲惨なものにしか見えないかもしれません。
けれどもここで重要なのは、彼が、神さまを信頼して、このような生き方と結末を喜んで受け入れていたということです。

①彼は、本当の喜びを知っていました。
3:29 花嫁をもつ者は花婿である。花婿の友人は立って彼の声を聞き、その声を聞いて大いに喜ぶ。こうして、この喜びはわたしに満ち足りている。
花婿の友人の最高の喜びは、この花婿と花嫁がその婚礼で祝福を受けることです。
それをもって、友の心は喜びで満たされると証ししています。
つまり、イエスさまに洗礼をさずけ、またイエスさまを人々に紹介することで、人々がイエスさまのもとに集い、そして神由来の福音のメッセージを聞き、赦しを受け取り、救われていく人たちが続々と起こされていく、これほどうれしいことはない！！、それがバプテスマのヨハネの喜びだったのです。

②彼は、自分が衰えることさえ受け入れた。
（新共同訳）3:30 あの方（イエスさま）は栄え、わたしは衰えねばならない。
バプテスマのヨハネの喜びは、約束されたまことの救い主であるイエス・キリストを通して、ひとりでも多くの人が救われることでした。
そのために、自分も一緒になって栄える…というのではなく、自分は衰えねばならない。そうして人々の目に留まらなくなることさえ、大切な使命としたのです。
もちろん、彼の弟子たちはそれを望まなかったことでしょう。
そんな彼らにヨハネは、真実な証しをゆだねたのです。
:28 『わたしはキリストではなく、そのかたよりも先につかわされた者である』と言ったことをあかししてくれるのは、あなたがた自身である。

バプテスマのヨハネは、すべてを、「天から与えられたもの」として”ていねいに両手を開いていいただく”、まさにそういう人でした。

:27…「人は天から与えられなければ、何ものも受けることはできない。」
それは、のちにいただく御国での永遠の祝福へとつながるものだとわかるからです。
パウロの証言はこうでした。
ローマ8:18 わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。

最後に）
天からの使命に生きた、イエス・キリスト。
その使命をうけとり、従順に歩み続けたお方です。その証があの十字架上に至る受難の歩みでした。
イエスさまの思いは、ご自分を通して「信じるものが一人も滅びることなく救われること」でした。
ヘブル人の手紙の中では、この方をわたしたちの信仰の模範として示します。
ヘブル12:2 信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもいとわないで十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである。
「ご自分の前に置かれている喜び…」、それはわたしたちが信じて救われ、そして永遠のいのち、永遠の祝福に迎え入れられることです。
そのために、キリストは「天からの与えらえた」その使命に生きました。

はたして、わたしたち一人一人も「天から与えられた」人生、時間、使命があります。
いやそればかりではなく、時には、病や弱さ、年齢を重ねることや、別離の悲しみさえもいただくことがあります。
もし、わたしたちが神さまを忘れるならば、それは苦しみが苦しみで、失望が失望だけで終わりです。でも「天から与えらえたもの」であることに気づくとき、それで終わることのない、神さまの祝福の世界が開けます。永遠の命と神の御国です。
ヘブル人への手紙12章の最後のところにはこうあります。
ヘブル12:28 このように、わたしたちは震われない国を受けているのだから、感謝をしようではないか。そして感謝しつつ、恐れかしこみ、神に喜ばれるように、仕えていこう。
ですから聖書を通し、礼拝を通して、信仰の友とも励まし合い、「天から与えられたもの」を両手をひらいてていねいに受け取ることを、良しとして行きましょう。
そうして、今まで自分の視野では見えなかった神さまがくださるものを見ることができ、希望に生きることの幸いを知るようになります。